

愛するという事 エーリッヒ・フロム著

鈴木晶訳 紀伊国屋書店 1991 年 報告 松本倫明

～第一章～ 愛は技術か

愛に対する誤解

愛とは、運命的に実現する物である、と社会では広く考えられている。しかしこの考えは誤っている。

このような考えが生まれる三つの原因がある。。

人にとって重要なのは、愛する事ではなく、愛される事
愛する事は簡単だが、愛するに相応しい人を見つける事が困難
恋に「落ちる」ことと、愛の中に「とどまる」事を混同。

※ 第二の謝った前提が生じた理由は二つある。

ロマンチック・ラブが広がった為、愛した人と結婚する事を人が求めるようになった。
商品市場の発達

愛は技術である

愛する事は困難であり、失敗を経験する。然し愛する事を止める事はできない。そこで、生きる事が技術であるように、愛する事も技術であると知らなければならない。

～第二章～ 愛の理論

一節 愛、それは人間の実存の問題

人間の孤独と無力感

人間は動物と異なり、本能を欠いた、不明確、不安定な世界に、いる。彼はこれにより、孤独を感じ、自然や社会に対する無力感を募らせる。この無力感を克服するために、彼は外界と繋がりを持たずにはいられない。

孤立感から逃れる方法——愛と実存

孤立感から逃れる方法は三通りあると、フロムは記しているが、実質的には四つであると解釈した。そしてどの答えを出すかは、ある人間が個人として、どの程度独立しているかによって異なる。

集団的興奮状態	集団への同調	創造的活動	愛
---------	--------	-------	---

上の四つの方法の中で、唯一愛のみが、完全な一体化を成せる。なぜなら愛は、人間同士が、確固とした自己、個性(乃ち実存)を保った俣の結合を可能にするからである。

愛とは

愛は、実存を保ったまま、他者と結びつくことを可能にする。それでは愛とはどのようなものなのか。

愛は何よりも与えることであり、もらうことではない(P43)
愛とは、愛する者の生命と成長を積極的に気にかけること(P49)
「秘密」を知る為の(略)方法が愛である。(P54)

愛は、能動的な活動であり、それは「与えること」と表現できる。そして愛を以て与える物は、まさに自分自身、自分の生命である。自分の喜び、興味、理解、知識など、自分の中に息づく物のあらゆる表現を与える。これは同時に、相手をも与える者にする。

この与える行為によって、能動的に相手と結合することによって、自分、相手、全ての人間を発見することができる。

二節 親子の愛

母親から子供への愛

母親は、子供が子供であるから、愛する。子供にとって、愛される為にしなければならないことは何も無い。そしてこの無条件の愛は、子供に平安を齎すのである。

子供の中の愛の芽生え

10歳頃まで、母親の愛を受ける子供にとって、問題は専ら愛されることである。まだ自分からは愛さない。然し、以降、自分の創作によって愛を生み出す感覚が芽生える。子供は親に対し、何かを送ることを思いつく。

思春期には、子供は自己中心主義を克服する。自分の欲求よりも相手の欲求が大事になり、与えることに満足する。これはまさに、「愛するから愛される」という原則への転換なのである。

愛の対象の変化

産まれてから暫くは、嘗て一体であった母親に対して、子供は愛を抱く。しかし子供が独立するにつれ、子供の愛の対象は父親になる。なぜなら父親は、思考、法、秩序と言った世界を表し、子供が父親から気に入られる、愛されるには、父親の規範に従わなければならないからだ。それに成功する子供が、父親から後継者として選ばれるのである。

父親的両親と母親的両親の併有

嚙て子供は成熟し、自分が自分の母であり、父である状態に達する、つまり「無条件の愛」と「規範」の両方を自分の中に持つようになる。成熟した人間はその両方によって、人を愛することができるのである。

三節 愛の対象

愛とは、特定の人間に対する関係ではない。一人の人を愛することは、その人を通して全ての人、世界を愛することである。然し乍ら、愛を向ける対象によって、その愛の形態にも種類がある。

a 兄弟愛

貧しい者、無力な者、よそ者に対する愛。あらゆる他人に対する責任、配慮、尊重、理解を伴う。表面的な違いを超えて、互いの内部の同一性を知り合う関係。

b 母性愛

母性愛は子供の生命の必要性に対する無条件の肯定である。母親は自分自身で子供を生み出すことによって、能動的な愛を発揮し、自分の人生に意味と目的を持つ。しかし母性愛は大変な難行となりうる。なぜなら、子供は必ず自立し、離れていってしまうからである。その場合、母親に要求されるのは徹底的な利他主義である。この利他主義は大変困難なので、真に愛情深い母親になるには、人類全体を愛することができなければならない。

c 異性愛

母性愛や兄弟愛は人類全てに対する愛であった。しかし異性愛には独特の排他性が伴う。なぜなら異性愛は、特定の相手と完全に融合したいという願望だからだ。つまりこれは二倍になった利己主義といえる。二人は融合しているが、それ以外の人からは孤立している。ところが、異性愛は相手の存在の本質から愛することであり、また存在の本質は、全ての人間において同一である。こうして人間は、一者を愛することによって、人類全体を愛することになるのだ。

※ 相手は誰でもいい？

ここでフロムの愛に対する態度として最も重要な既述が為される。それは、愛とは「決意であり、決断であり、約束である(P91)」ということである。

愛は本質的には、意志にもとづいた行為であるべきだ。すなわち、自分の全人生を相手の人生に賭けようという決断の行為であるべきだ。 P90

ところが、人類全体の本質を、決断を以て愛することが、異性愛であるからといって、その愛の対象が誰でもよいというわけではないのである。

我々は皆「一者」であるが、一人一人はかけがえのない唯一無二の存在である。異性愛とは、かけがえのない相手を、本質から知ろうという、決断なのである。

d 自己愛

愛が、全ての人間に対するものであるので、自分自身を愛することも美徳である。自分自身の人生、幸福、成長、自由を肯定するのである。しかし自己愛は利己主義と混同されることが多い。利己主義の人間は自分を愛せない、寧ろ憎悪を抱いており、それ故、誰も愛せない。

e 神への愛

人類の歴史において、神の愛は変化してきた。

母なる者への無力な者の依存→父性的な神への服従→愛と正義の原理

~第三章~ 愛と現代西洋社会におけるその崩壊

この項では、西洋文明の社会構造とそれが産んだ精神が、愛の発達を促すかどうかを問う。結論から言うと、答えは否である。まずは現代西洋社会について、乃ち資本主義について概観を得る。

資本主義と疎外された我々

資本主義社会においては、全ての物は市場原理に基づく。よってどんなに必要なものであっても、市場において需要がなければ、何の交換価値もない。このような経済構造は、価値判断にも影響を与える。今や、蓄積された物品は、生命を持つ人間の能力や生命よりも高い価値を持っている。これは、前章で示した「一者」の中の唯一無二の個人の価値を貶めることになる。

資本の集中化は以下の二つの結果を齎した。第一に、経営陣や労働組合といった集団に主導権が移ったことにより、多くの人々が独立を失い、巨大な管理者に依存を強めていることである。第二に、分業体制が整った為に、個々の労働者は個性を失い、使い捨ての部品のような存在に貶められた。現代資本主義社会で求められているのは、大人数で円滑に協力し、消費を好み、好みが標準化されていて、他からの影響に弱い、予測が単純な人間である。しかも彼らは、自分は自由で独立していると信じているが、実は社会と言う機械の中に自身をはめ込んでいる。

我々は最早、自分自身からも自然からも疎外されている。行動も感情も画一化され、自身が目的ではなく、社会の為の手段になってしまった彼らは最早ロボットと変わらない。彼らは常に孤独、不安定感、不安、罪悪感に怯えている。

追撃ちをかけるように、現代文明は孤独に対する処方箋を用意する。機械作業、交換原則、大量消費、娯楽の画一化。これらは個々人が集団に身をすり寄せ、「楽しい」生活を享受する手助けとなる。ここでの「楽しい」は「食る」の意味と解釈した。

歪んだ愛

現代の社会は、愛をめぐる状況にも影響を与える。個性を失い、生命力を欠いた人間には真の愛を修練できない。なぜなら愛は自身の生命の最大限の表現だからである。

当時の結婚に関する記事は、夫婦円満の家庭、円滑に機能するチームこそが理想の結婚であると説く。然しこれは社会の中の使い捨ての歯車と、考え方において何ら変わりはない。こうした夫婦の関係は、ぎくしゃくすることはないであろうが、お互いに表面をなで合う関係以上に発展しない。この対立を避けた理想の家庭像は、孤独からの避難所に過ぎず、利己主義が二倍になっただけなのである。

この崩壊した愛こそが、愛の「正常な」姿となっている。本来は歪んでいると見做されるべき愛こそが、理想とされているのである。

補足 歪んだ神への愛

歪んだ愛は、神への愛にも見られる。この愛においては、現代人は退化していると言える。中世社会では、神の救済に究極的な関心が寄せられ、それに向けた活動がささげられた。一方、現代人は、神の助けを求めるものの、神の教えに従おうとしない。彼らにとっての最大の関心事は、自分の生命を投資と考へ、如何に利益を得るかと言うことでしかなくなってしまった。

～第四章～ 愛の修練

本章では、愛という技術を修練する為に必要なものを列挙する。そして、現代西洋社会において、愛の修練が求められていることを主張する形で、本書は幕を閉じる。

愛の修練

	———(a)規律 —————	
	———(b)集中 —————	
愛	—————(c)忍耐 —————	技術の習得
	———(d)関心 —————	
	———(e)ナルシズムの克服 —————	愛の習得

(a) 規律

規律がなければ、人生は纏まりを失ってしまう。そして重要なのは、外から押し付けられた規律ではなく、自分の意志であることである。

(b) 集中

集中できるということは一人きりでいられるということだ。独り立ちできずに誰かにすがるような関係は、愛ではない。また集中することは同時に、全身で現在を生きることでもある。これは特に愛し合う二人には重要である。彼らはその場にいることを確りと学ばなければならない。

では集中力は如何にして得られるのか。集中力を得るには、自分自身に敏感にならなければならない。それは自分の中の変化に気付くことである。なぜ不安なのか、なぜ憂鬱なのか、その理由を内なる声に求めるのである。

(c) 忍耐

(d) 関心

(e) ナルシズムの克服

ナルシズムの傾向の強い人は自分のうちに存在するものだけを現実として、判断する。一

方、ナルシシズムの対極にあるのが、客観性である。客観性をえるには、客観的に考える能力(理性)を要し、理性の基盤となる謙虚さが必要である。愛においては、自分が関わり合う人全てに対して客観的に向き合わねばならない。

ここで、合理的な信念が、愛の修練に必要なになる。この信念は、他者に迎合したものではなく、自分自身の思考や感情の経験に基づいた確信でなければならない。愛する為には、他者を、そして自分を信じなければならない。自分を信じなければ、他者を愛する決断を下せない。他人を信じることは、相手の本質部分への信頼であり、彼の可能性を信じることである。信念を持つには、更に勇気がある。それは苦痛や失望を受け入れる覚悟であり、ある価値に対して、他の全てを投げうって、目指すべきものである。

象としても、愛の可能性を信じることは、人間の本性そのものへの洞察にもとづいた、理にかなった信念なのである。(P198)

愛するということとは

ここまで愛に関して重要な要素や心構えが提供された。フロムは、ここで愛するということについて纏めに入る。

愛するということは、なんの保証もないのに行動を起こすことであり、こちらが愛せばきっと相手の心にも愛が生まれるだろうという希望に、全面的に自分をゆだねることである。愛とは信念の行為であり、わずかな信念しかもっていない人は、わずかししか愛することができない。(P190)

愛するということは、自発的な信念を持って、相手の中にも愛が芽生えることだけに全てを賭けて、能動的に相手と生命を分かち合うことである。

社会への警告

愛を説くことは古くさい説教ではない。愛は、如何に生きるべきかという問題に健全な答えを与えてくれる。しかし、現代社会は大衆操作によって操られ、個人はかけがえのない自分を見失っている。本書はそのような社会に対して、警告を投げかけて幕を閉じる。

愛の性質を分析するということは、今日、愛が全般的に欠けていることを発見し、愛の不在の原因となっている社会的な諸条件を批判することである。例外的・個人的な現象としてだけでなく、社会的な現